
抹消

百合茶

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

抹消

【Nコード】

N9079B

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

最近の世の中は物騒だ。都会はますます物騒だ。そんなところを逆手にとってみたけれど…

（前書き）

『消』をテーマにしたグループ小説です。
他の作者さんの作品も、『消小説』で検索すると読めますよ。

最近の世の中は物騒だ。ぶつかっただけでも殺される。

警察は全くあてにならない。と言うよりも、男の職種柄、頼る訳にもいかなかった。

男は絶えず命を狙われていた。

ドアの前、椅子の下、クローゼットの中…これまで幾度となく殺気を感じた。それでも男の感覚が鋭かったからか、単に運が良かったためか、今日までこうして生きている。

しかし男は限界を感じていた。

殺し屋として妻子を持つのは、負担が大きい。それにもう若くはないのだ。

そこで男は家族を連れて、都心へ移った。

最近の世の中は物騒だ。

都会はますます物騒だ。

都会には、不特定多数の人々が流れ、溢れてごった返っている。

隣の住人の名前どころか、顔さえ分からない。すれちがう人々が善人か悪人かも判断がつかない日常では、常に用心が必要だ。

それでも…いや、だからこそ男はこの地に定住する事にした。

「都会の物騒な所を逆手に取ったんだ。」

男は息子のおもちゃのように見える車を眺めて言った。

「あら、物騒と言っても設備はハイテクよ。」

ベランダのオートロックを、確かめながら妻が微笑む。

指紋、声紋、ＩＤカードにパスワード…もはや施錠に『鍵』はいらない。

何しろここは、設備・警備がトップクラスのマンションだ。伊達に

高さだけ積んでいる訳ではない。

『ケイコク。ロックが解除されたままです』

ピピピ、と電信音がなって、セキュリティシステムが作動する。男は思わず舌打ちした。

仕事をする時は、『俊敏且つ慎重に』を第一とする男だったが、機械はさらに『正確』だった。

きっかり2分で警告。そして、その10秒後には、ベランダの監視カメラが男を捉えた。

小さなレンズが、品定をするようにキラリと光る。男にはそれが、自分を見下ろす刺客の漆黒の瞳か、自分を狙う銃口に見えた。

『プログラムと一致。認証しました。』

その一言で、男は詰めた息をそっと吐き出し、ベランダを後にした。

「…つけられている。どこかで足がついた。…いや、いい。ここで切る。」

男は小声で早口にそう言うと、携帯の電源を切った。

帰宅ラッシュをとくに過ぎたと言うのに、電車からかなりの人が降りてきた。

刺客の目を惑わすにはちょうどいい。

とりあえず、人混みに紛れ、駅を出ると、スクランブル交差点から繁華街へ回りながら家路に着く事にする。

慣れているはずなのに、落ち着かない。

周りを見渡せば、人、人、ヒト…。

一人ひとりの動きに警戒しつつ、男もまた人混みの中の点になる。背中に感じる視線が途切れた。巧く振りきれたようだ。

いや、しかし…

男は路地に入ると、足を止め、耳を傾けた。

一人、二人、三人…

思わず舌打ちする。

それは間違いなく同業社で、最近名を挙げているグループだった。3、4人でチームを作って、一定の間隔から一気に襲ってくるので、成功率は9割以上だと言う。

男は、ビルの隙間からのぞく月を眺めながら、スーツに忍ばせたナイフの数を確かめた。電柱の陰で、闇が動く。誰かが待ち構えている。

月の輪郭がビルの灯りでぼやける。

散々な夜になりそうな、そんな気配がした。

男は足早に外灯を避けて、電柱の側に近付くと、振り向き様に右手を振りかざした。

ぶすり、と。強く深く。苦痛に歪む見覚えのある顔が、外灯の下に映し出される。

どこかで見た顔：知らない誰か。

背中がむず痒いような、妙な感覚がしたが、記憶を巡る事はしない。記憶を巡ったところで、それがどうなる訳ではない。

男にとっては、目の前に転がる人間よりも、殺気が急に消えた事の方が重要だった。

つまり、刺客が狙っていたのは、男ではなく、また目の前の誰かも、男を狙う刺客ではなかったのだ。

ビルの間を抜ける風が冷たい。

男は繁華街をさまよっていた。

読み違えたのはこれが初めてだった。

もしかしたら、もう引き時かもしれない。帰ったら妻にそう言おう。男はようやく決心がついて、電話ボックスの中で、血の着いたナイフを最後のひと仕事として丁寧に拭いた。

そんな男に気付くのはもちろん誰もいなかった。

残業帰りのサラリーマンのように、疲れた体を引きずって、マンシ

ヨンのパネルに手をかざす。

お決まりの指紋照合だ。

しかし、ドアは開こうとしない。

機械と言うのは融通が利かない。きっと、汚れた手では認識しないのだろう。

そこで今度は部屋の暗証番号とIDを同時に試した。

カチリ、と音がしてカメラが動いた。

いつかと同様に、レンズが品定をする。相変わらず銃口のような。ウィーン、と言う機械音とともにいつの間にかレーダーも作動している。

男は落ち着かなくなつて、妻へ電話をかけた。呼び出し音が3回だけ鳴つて、留守電のメッセージに変わる。

もしかして、妻に何かあつたのだろうか？

マンション関係者に事件があつた時、全セキュリティは一時的に停止すると、入居した時に警備会社から聞いた。

男は胸騒ぎを覚えた。鼓動が速くなり、体中からどくどくと脈が走る。

いっそ、ドアをこじ開けようか…。

すると不意にドアが開いて、息子が顔を出した。

無駄な心配だつたようだ。安堵のため息がもれる。男が息子の名前を口にしかけたその時、

「おじさん、だあれ？」

『プログラムが存在しません。部外者を抹消します。』

二つの声が重なって、カメラが火を吹いた。

「おじさん、パパとそっくりだけど、僕は騙されないよ。僕のパパなら、ちゃんとプログラムにインプットされているもん。」
「最近の世の中は物騒だ。」

識別番号で人を認識するのだから…。

次の日の新聞に、

『ハイテクマンションのオーナー、刺殺。』

『オーナー死亡でシステム誤作動か？身元不明の男性変死』
と言った見出しが並んだが、それは小さな記事にすぎなかった。

そして、抹消された男も身元が分からぬまま、記憶から…

（後書き）

うん。いつもより長くなっちゃいました。

人をIDや数字でしか認識出来ない世の中になったら、本当に恐ろしいですね。

人を直接殺めずとも、消す事ができる時代がくるのかしら…。

そうならない事を願って…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9079b/>

抹消

2010年10月28日07時26分発行